ることなく，毎年夏休みともなれば万障繰り合わせて，数日間は夫も子供も放り出し，必らず何処かへ打ち揃って出掛けている。また，地方から誰か出て来たり，その他何か一寸した口実が見つかると「○○でも食べない？」のひとことで，見事にパッと集まる。そして，２０年の間それぞれの道を歩み，異った経験を積み重ねて来ている友との話題は，尽きることを知らない。仕事のこと，家庭のこと，さまざまな人間関係のこと……友との他愛のないおしゃべりの中から，キラリと閃めく貴重なヒントを与えられたことが幾度あったろうか。本当に友達とは，嬉しく懐しく，そして有難いものである。

（３回生）

近　況　報　告

北　村　紀　子

小学校から十数年も通い続けた反動という訳でもありませんが，卒業以来学校にはすっかり御無沙汰で，この十七年一度も校門をくぐらず過ぎてしまいました。ほの暗い地理の教室での四年間は，はるか昔の出来事となり，地理とは全く縁なき生活で，娘に何の為に大学で勉強したのと言われる仕末です，その間夫の転勤と共に，大阪，東京，名古屋と移って，子供も高一と小六になりました。この母親ではあまりいい見本にはならず，娘には一生続けられる仕事を持ってほしいと思っています。

名古屋に来て二年たちました。すき間だらけの日当りの悪い家で，冬の寒さには閉口しましたが（冬　冷蔵庫を開けると外より暖い空気が出て来る有様）それでも結婚以来初めての木造の家での生活は，子供にとっても得がたいものと楽しんでいます。

団地での地面からへだてられた空間に較べると，まあ同じ広がりの中に何と生活する生き物が多いのかと驚かされます。蚊，ハエ，蜂，毛虫，蟬，油虫，ナメクジ　の多さに悲鳴をあげ，所かまわぬクモの巣，又小さなアリ達は，一寸油断すると，わっとばかりに現れて，その行列はみているだけであきません。大きな柿の木に御機嫌になっていたら，暑さと共にイラガの毛虫が大発生，黄緑で毒針つきのを毎日何百匹と殺して閉口しました。

今は冬空に残った柿の赤い実にヒヨドリ，メジロが群れています。町中に近いのに隣が林なので，野鳥が多く，ここに来て始めて本と首っ引きで名前を覚えました。

冬こたつに入って見ていると，ガラス戸の庭をまるで舞台の様に，上手から下手から次々に色々な鳥が登場し又退場して行きます。二羽でチッチッとお尻ふりふりにぎやかに来るのはウグイス，アオジは雨上りに地面をつついて現れます。他の鳥が餌場に寄ると必ず低空飛行で突っ込んで来るヒヨドリは，夫婦の一方が餌台に上ると片方は必ず側の枝で待っています。メジロは大勢でにぎやかにくるし，丸々太って食いしん坊のツグミはおっかなびっくりチョコチョコ小走りに出てきてさっと逃げていきます。小授鶏のけたたましい声に驚いたり，鳥達にはずい分楽しませてもらいました。今年の五月にはたった一日だけカッコーが来て朝から日の暮れる迄鳴いて子供達は感激，私も姿を始めてみました。

カッコーをうつつに聞くは幼き日五月の　仙台の朝以来なり

転勤はとても面倒ですが，後になってみれば又とない経験かもしれません，これから又野鳥を眺めて冬ごもりで，来春辺りは東京に戻りたいものと思っております。　（６回生）

田　舎　も　田　舎

二　瓶　直　子

パリから帰国した或る有名な洋画家が，日本は緑が多過ぎて絵にならないと言った。私共が約６ケ月間暮した米国・ノースカロライナ州東部は，松の平地林の間に農地の散在する低平な海岸平野で，全く画材に不適な場所であった。当地最大の都市グリーンビルは同州最大の煙草集散地で，大学町でありながら，商店街の端から端まで徒歩１分，日本人家族は我々だけ，醤油すら入手できない想像に絶する田舎町であった。所謂南部の，保守的な，事件の乏しい平和な社会であったが，外国人の私共には，大都市では味わえない心の交流を持つ事ができた。土曜日毎に，約３００kmドライブし，同州東部の道は隈なく通過した。土を採取し，動植物に触れ，又ヨットに乗ったり，ガレッジセールを通じて，上流階級からその日暮しの人達にも接触できた。公害も皆無で，water pollution とは洪水を指し，洪水時には池と化した農地に流行のヨットが浮かび，女迄が魚釣りを楽しむ。強風時には畑の砂が飛び，一寸先の視界も妨害される。そんな日は皆家に引きこもっているらしい。

煙草の苗床の散在する農地を通過中，新築間もない家が全壊，隣家も台所を残して家半分が無く，而も周辺には材木，家具の破片すら見えない。ドライブを続けていると，約５００m離れた林の，枝という枝にそれらが飛散し，ひっかかったりしていた。トルネードの跡であった。森の木々も引裂かれて生木が露出し，５ケ月後でも風の通路を追跡できた。

低湿な海岸平野の砂地は曲者である。同州沿岸の海岸外洲アウターバンクスを旅行中，砂丘の土壌断面の中に異常に白い層を発見，路肩に車を止めた。突然夫の「ダメダ！」の声。車輪は底無しの砂に埋まり，動けなくなっていた。炎天下，２人の乳幼児を抱えた母親が砂まみれになり立っているのを見て，次から次へと車が止まる。クレーン車を呼びに行っても数日後にしか来ない。そしてひどく高いと言って皆頭から砂を被りながら手伝ってくれたが，車は沈むばかり。結局チェーンを掲載した車の到来で無事事件落着。気をつけて行けと肩を叩いて行ってしまった。

子供連れでは文献捜しも容易でない。本屋は小さいのが２軒のみ。図書館にも行けぬ。幸い３週毎に移動図書館がアパートにやって来て，欲しい本を毎回１０数冊ずつ持って来てくれ，次回の注文をとり雑談してゆく。

米国田舎ならではの心暖まる経験を断片的ではあるが紹介した。　（１５回生）